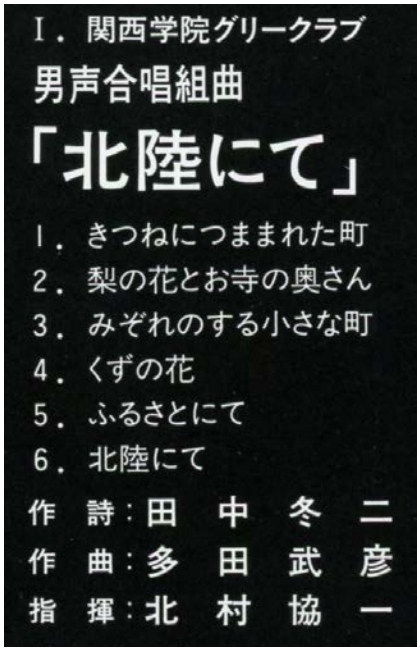
第40回記念東西四大学合唱演奏会【1991 年（平成 3 年）6 月 16/22 日】

フェスティバル/東京文化会館



—KWANSEI—
男声合唱組曲「北陸にて」

組曲「北陸にて」　　多田武彦

1954年（24歳）に処女作「柳河風俗詩」を作曲してから以降、毎年、一作乃至五作を書き続けたが、1962年(32歳)以降は、毎年一作しか書いていない。62年が「北陸にて」、63年が「京都」（混声・芸術祭奨励賞受賞作品）、64年が「白き花鳥図」。そして、1965年と66年は一作も書いていない。（1967年の再会第一作は「雨」）

今思い返してみると、1953年に銀行に入ってから九年経った62年に係長に、63年に課長になったために、責任のある仕事が急に増え出した。特に課長になったとき、当時の厳格な支店長は私に作曲をやめるように勧告していた。ちょうどNHKには「京都」を、関学グリーには「白き花鳥図」を書くことになっていたので、これらが終わったら、銀行の仕事に専念しようと決心していた。

こうした環境の中で、1962年「北陸にて」を作曲している。そして詩人田中冬二は1894年福島に生まれた。中学在学中から文学を好み、銀行に入ってから転勤の行く先々の風物や人々の生活を、素朴ではあるが清明で繊細な筆致で描いて行った。1949年、55歳で銀行を定年退職後、某社の役員となった。安田銀行（現・富士銀行）110年の歴史の中で、日本の詩壇に名を連ねているのは、田中冬二唯一人である。

田中冬二が銀行を辞めた 4 年後に私が入行しているので、現役同士で会ったことはないし、作曲のときこの事実を知ったが、会う機会はなかった。彼が第二の人生を送った会社の親会社を私が担当したときも、会う機会がなかった。

しかし、田中冬二の一連の詩群は、規則正しく厳格な銀行員生活という枠組みの中で書き綴られた……、他の詩人の作品と異なる。丹念で几帳面な心の動きが伝わってくる。そんな共感をかみしめて、組曲を書いた。今宵と同じ、北村協一氏の指揮で、上智大学グリークラブが初演した。詩の精神を汲んで、誇張のない、実にオーソドックスな北村氏の解釈であった。爾来、この組曲は北村氏の得意とするレパートリーの一つとなり、今日に至っている。

四連第40回記念演奏会おめでとうございます。戦後日本の合唱音楽がこれほどまでに発展したことについては、そのときそのときに、合唱を愛する多くのかたがたのご活躍があったためだと思っています。その中にあって、とりわけ四連の果たした役割の大きさを、多くの人びとは、心に抱いていることでしょう。私もその一人で、まるで世界の超一流のアーティストの演奏を聴くときのような感動と期待を秘めて、開幕のエールを聴き、共演に耳を傾けたものです。

そのような多くのファンの期待に応えて、これから先も、四連の伝統を守り続けていっていただきたいと思います。

演奏会のご成功を心からお祈りいたします。